

巻 頭 言



次代を担う若者の育成*

日本音響学会副会長 金井 浩**

新年明けましておめでとうございます。本年も会員の皆様のますますのご発展とご健康を祈念いたします。巻頭言を執筆する機会をいただきましたので、本学会が直面する重要課題である会勢維持（拡大）に関し「次世代を担う若者の育成」という観点から私見をまとめさせていただきます。

おいしい葡萄酒を作るためには、ブドウの苗木を、敢えて枯れた土地に植えるそうである。植えられたブドウの木は水分を求め懸命に根を張ろうとし、その結果、土壌の中のミネラルまでを一杯吸収できるようになり、やがておいしい葡萄酒ができあがる。もちろん、苗木を枯らさぬように管理はしているのだろうが、過度に水分を与えてはいない。次世代を担う若者の育成においても類似点が多いと思う。戦後の社会を現在まで復興・発展させて来られた団塊の世代以上の方々は、小学校で同学年が十数クラスもあり、生まれながらにして懸命に根を張ろうとする宿命にあった。こうした団塊の世代の方々が現役を引退する時期を迎え、残される世代の責任は重く、しっかりした基軸を持つことが重要となる。

科学の目的は、「人間の生活水準の向上を通じての社会貢献」と共に、「自然の巧みに好奇心を持つことの重要性とその解明過程に大きな意義があることを若者に示すこと」にある。従って、学会・大学・研究機関には、現在の学術レベルのさらなる向上と共に、「次世代の研究者の育成」という使命がある。

研究を通しての「次世代の育成」において

の重要な点は、優れた研究成果を出すことを優先して若い研究者に指導教員の言うとおりに実験を行わせることよりも、若者が自ら観察し、考え、試行錯誤の末に、ようやく成果を出せるよう導き、その過程を通して「科学の解明は面白い」という感動と（わずかずつでも）自信を付けさせ、しかし「自然と生命の巧妙な仕組み」の前には、人間が解決すべき課題は“まだ無限にある”ことも知らしめるということだろう。そのため、若者に「多くの失敗を経験できる環境と時間的・精神的な余裕」を与え（大学課程では限られた期間内にはあるが）、自分がその課題解決過程の当事者になるには、（すぐに役立つかどうか保障がないため効率は非常に悪いが）「普段から広い知識を付ける努力も鍵であること」を強く認識させる指導が必要であろう。大学の教員や指導者自身は、こうした観点の教育に必要な「秘術」を常に意識することが大切である。

2004年4月に国立大学が法人化され、各大学の自主性とは引き換えに、予算面ではかなり厳しい運営状況になっている。そのため産学共同が強く勧められ、大型の競争的研究資金獲得の優先度が高くなりつつある。大学が、短期間に解決可能な手堅い課題や資金獲得だけを重視すれば、学問の場としての本来の「チャレンジング精神」が喪失してしまう。大学教員が、受託した研究課題の解決を学生に託すと、期待どおりの成果を出すことが優先されてしまう。こうした性急な成果追究を「人の育成」よりも優先する事情は、昨今の企業においても同様であろう。更に、最近の大学が等しく抱える博士課程充足率向上のため等の方策として、国や大学レベルで充実されてきた学生や若い研究者への研究費・渡航費

* Encouragement of young researchers whom the future belong to.

** Hiroshi Kanai (Graduate Schools of Engineering and Biomedical Engineering, Tohoku University, Sendai, 980-8579)

の助成等は、支給される側の「心底ほしい」という意思の確認なしに過度に行われているのではないかと危惧される。例えば、応募申請してすぐには採択に至らなくとも、その後幾度か挑戦してやっと採択に至るかどうかという点である。過度な助成は、日本の未来を託す貴重な苗木に過度な水分を与え、「懸命さ」を発揮する機会を奪ってしまっている可能性がある。

科学者には、当事者にしか味わうことができない歓びを体得する特権がある。長い苦難の末に新しい発見を自分の手中にした時。緻密な研究計画遂行中に偶然予期せぬ発見に出くわした時。研究発表会や論文で従来常識を覆す大発見に遭遇した時。自分の研究発表で高名な先生に貴重な意見をいただいた時。騒がしい学会発表の場で画期的な結果を語るほんの一瞬、聴衆全体が同期して息を飲み、しんと静まり返った瞬間。苦勞して書いた論文が厳しい査読過程をパスした時。学会誌に掲載した論文が面識のない研究者に引用された時。開発した方法が商品になって市場に出た時。これらはいずれも研究者冥利に尽きる貴重な体験だろう。研究開発を通して、一人でも多くの若者にこのような「素晴らしい経験」を享受していただきたい。自分の秘めた能力を信じて自身の限界に挑むこと、気概を持って日頃の努力を継続すること、これらによって得られるであろう「感動の価値」を、自らの体験を通して是非知っていただきたいと思う。

そのため大学研究者は、日々雑務で多忙な中、「遙か数十年先にブレークスルーをもたらすかもしれない発明発見を信じ、日々自ら探求するというチャレンジング精神」を持続し、かつ、そうした夢に懸ける姿勢を自ら示し、若者を感化することが大切なのであろう。

2006年4月には、学習内容が従来3分の2に削減された新学習指導要領に従って高等学校までの教育を受けた学生が大学に入学し、2011年4月には就職又は大学院に進学する。学習内容が減ったことは、獲得している

知識の量が少ないということであるが、むしろ、その教育課程において、「苦勞して通った関門の数」が少ないことの方が深刻な問題である。教育の目的は、知識の伝授と共に、鍛錬を通して厳しい試練にも耐え抜く「強い精神力」を培わせることにある。鍛錬の末、運悪く成功裏に終わらなくとも、その努力の過程は必ずや人間的成長の糧となる。

昨今の我が国の文部科学行政の施策では、少数の優れた施設や研究者を過度に優遇して育てようとしているように見受けられる。一方、企業では、グローバル化のため、給与面での企業内格差を増加しつつある。しかし、我が国の奇跡的な戦後復興や現在の世界一安全で信頼ある社会形成を支えてきたのは、各組織における上位数%の人ではなく、国民全体の、教育とモラルの高い質と絶え間ない努力によるところが大きい。日本全体が自信を喪失している今、学会としても、長期にわたって「次世代を担う若者を育成する」ための様々な施策を検討するにあたり、(既に優れた業績を上げてきた研究室に所属していることで)上位数%に入っている人だけを対象とするのではなく、「挑戦的に努力を継続している人が皆対象となるような視点」が重要であろう。

「苦勞の末のわずかな成功によって得る感動」を体験させ、「気骨な科学者・技術者になる動機付け」を行うことに、次代を担う若者への「教育の基軸」があるとするれば、本学会の学術論文や研究発表会を通し、優れた研究成果が会員に伝わるだけでなく、それらの著者や発表者が体験したであろう「研究は大変だけど面白い」という感動が読者や聴衆に伝授されれば大変幸いである。効率性・便利さ・経済性を価値判断の中心に置くのではなく、地道ではあるが人の感情と感動を大切にしたい息の長い丁寧な施策によって、学会本来の基軸実現のための仕組みに一層近づくことができれば、優れた人材が育ち、豊かな国づくりに貢献できるのではないかと願う次第である。